

ロシア定期市前史

——マカリーエフ定期市をめぐって——

坂 内 徳 明

一

ロシアの定期市は、西欧のそれとはかなり異なり、十九世紀に大きく発展した。⁽¹⁾ その中でも特に注目すべき存在は、ヴォルガ中流の都市ニージニイ・ノーヴゴロド（略してニジェゴロド。一九三二年にかの著名な作家の文学活動四十周年を記念してゴリキイ市と名を変えて現在にいたる）で開催されていた定期市である。

これは年一回、公式には露暦七月十五日から八月二十五日まで、ニージニイの町をオカ河の向うにのぞむ対岸の土地で行なわれたもので、取引高・規模などの点で十九世紀を通じてつねにロシア第一位にあった。⁽²⁾ 「ロシア

の商売の一年はニジェゴロド定期市に始まり、同じくニジェゴロドの定期市で終る⁽³⁾」と言わしめた十九世紀ロシア定期市を代表する存在であった。この市が発達した要因としては、ヴォルガ河という物資運搬上の絶好の条件、オカとヴォルガとの合流点にあるという地の利（オカをさかのぼればモスクワに通ずる）、またこの地域がロシア人と非ロシア人、さらにはヨーロッパとアジアとの接点であったことなどがあげられる。

ところで、このニージニイの定期市は一八一七年に始まり、革命後の一九一九年から二一年までは中断されるが、そのあと復興されて一九二九年まで続行する。このことでわかるように、この市の歴史自体はさほど古くは

ないが、これは次の事情によっている。つまり、一八一六年に、それまで二世紀近くにわたってヴォルガ中流沿岸の大定期市として隆盛を誇っていたマカリーエフの定期市が大火によって焼失し、七十キロメートルほど上流のニージニイへ移転されたからである。このマカリーエフの市がロシア人にとっていかに大きな意味を持っていたかは、市が移ってのち二十世紀にいたるまでニージニイの定期市をマカリーエフの定期市と呼びならわしていたこと⁽⁴⁾によっても知ることができる。

本稿のねらいは、ニージニイの市の前史とも呼ぶべきマカリーエフの定期市がいかなるものであったかを再現し、考察することにある。筆者の関心は、十九世紀のニージニイ定期市にある。そのアプローチとして、市の社会経済史的側面を考慮しつつ、民衆文化史における市の存在を考える。そしてその際には、「定期市のフォークロア」を念頭⁽⁵⁾においた「市の社会史」の方向が必要とされるであろう。本稿で扱われるマカリーエフの事例は、そのための序となる。

(1) ここで扱われる「定期市」とは ярмарка の訳語である。俗語、古語として ярмонка, ярманка がある。語源

はドイツ語の Jahrmarkt で、ポーランド語を介して十七世紀半ばにロシアへはいった。ほぼその頃にロシア国内市場が著しく発展したと無関係ではない。西欧および日本におけるロシア定期市への言及は、ごく不十分なものがら、Walford 1883、石原潤「ヨーロッパにおける定期市および大都市の展開について」名古屋市立大学教養部紀要人文社会研究14(一九七〇)にある。前者は、十九世紀ロシアの主要な定期市としてヨーロッパ・ロシア地区の十四、アジア地区の三つの市について概略している。ちなみに、

表A ニージニイへの商品集荷高

年	ニージニイへの集荷高	ロシア全体の集荷高	搬出高
1831	34.6	47.6	65.7
1840	47.3	78.1	85.4
1850	56.3	93.3	98.1
1860	102.7	159.3	181.4
1867	125.3	265.3	244.8

(単位 100万ルーブリ)

出典 Остроухов, 1972, стр. 220.

一八六〇年代はじめのヨーロッパ・ロシア四十八県には、一、一二七の都市定期市、四、七六八の農村定期市が存在していた(Статистический вѣстник, т. 1, 1866)。また「中央統計委員会」資料によれば、一八九四年には一六、六〇四の定期市、一、〇六一、〇〇〇、

〇〇〇ルーブリの取引高が確認されている。これは一定期市あたり六、四〇〇ルーブリ、住民ひとりあたり八・ニールブリにあたる(Виноградов, 1900: 396)。

(2) 十九世紀ニージニイ定期市への商品集荷高は表Aのとおり。

五十年代後半における市の商人数は一五、〇〇〇人(ロシア人、外国人を含む)、その家族・召使・職人・雑役・人足などを含めると一二〇、〇〇〇人だった。これに対して、その当時市を訪れた者の数は八月初旬の最盛時に一日あたり二五〇、〇〇〇人、市の期間全体を通してのべ一、五〇〇、〇〇〇から二、〇〇〇、〇〇〇人であったという(Мельников, 1850: 286; Остроухов, 1972: 216—9)。

(3) Канделаки, 1914: 13.

(4) 現在の地名表記に従えば、マカリーエヴォ Макарьево であるが、ここでは十九世紀の表記によってマカリーエフ Макарьев とした。十九世紀後半のモスクワ市井の庶民生活の中で「マカリーイ」への熱気と殺到ぶりについて記したものと「ボリツァヤ, П. И. Московская страна. В кн.: Ученый Москва. М., 1964.

(5) 「定期市のフォークロー」については、Боратын, 1968 を参照。ただし彼はこのタームを見世物小屋の呼びこみやのぞきからくりの口上などの言語芸術のみに対して、しかも手法的側面のみで使用しており、筆者の考える「市の社会史」の方向とはかなり異なるものと思われる。

二

運搬路としてのヴォルガが持つ絶大な意義と、それにより発達した流域の商業活動は、早くからヴォルガ中・下流沿岸に定期市を発生させていた。特にカザン北東に位置するアールスクが原は、十三世紀以降に市が開催されていた場所であり、ニージニイ定期市のみならずロシア全体の定期市の発祥地と考えられている⁽²⁾。アールスクの市は毎年七月に開かれ、ここにはモスクワ、ノーヴゴロド、プスコフなどロシア各地はむろんのこと、中央アジアやシベリア、中国やインドなどからも商人が集まったという。この市について詳しいことは不明だが、十五—十六世紀初頭にいたるまでその名は広く知られていた⁽³⁾。

金帳汗国の分裂と衰退、十五世紀に成立したカザン汗国とロシアとの抗争という状況下で、ヴォルガ流域の定期市も変化を蒙った。ヴァシーリイ三世は一五二三年に、ヴォルガとスーラ河の合流点に自らの名を冠した新しい町ヴァシリゴロド(また、ヴァシーリエフ・ノーヴゴロド、ヴァシリスールスクとも呼ばれる)を作り、ここで定期市を開いた。翌二四年には、カザンにおけるロシア

人の商業活動が禁止され、ヴァシリゴロドでの市の発達⁽⁴⁾が促された。

しかしながら、この時期のヴァシリゴロドを含めたヴォルガ中流地域の商活動と定期市は、全体として停滞していた。この地域の定期市の歴史にとっては、「伝説のみによる暗黒のページ」が続いたのであり、この地域を訪れた西欧人旅行者たちの記録にも、市に関する言及はほとんど見出されない⁽⁵⁾。マカリーエフ定期市が生まれ、ヴォルガ流域の経済活動の中心となるのが確認できるのは、十七世紀にはいつてからである。

ヴァシリゴロドからさらにヴォルガをのぼり、小村ルウイスコヴォとはヴォルガをはさんで対岸にあるマカリーイ(ジョルトヴォードゥイ)修道院は、一四三九年に僧マカリーイによって建てられたものである。彼はこの地に住むタタル、モルドヴァ、チェレミス、チュヴァシなどの非スラヴ諸民族にキリスト教の洗礼を与えたことにより、人望を集めていた。しかもここは商業・軍事上の移動路にあたり、ヴォルガ中流地域の要所に位置していたため、商業の守護と戦勝とを祈願する場所として訪れる者が多く賑わっていた。しかしタタル人の逃亡

による混乱の中で、マカリーイ修道院はウラ・マフメット汗によって破壊され、開祖マカリーイとその弟子はヴォルガをのぼってコストロマー地方のウンジャへとのがれ、マカリーイはそこで死んだ⁽⁶⁾。

一六二四年にムーロムの修道僧アヴラーミイはマカリーイ修道院の再興を計画し、皇帝ミハイルに願ひ出た。皇帝とその父で共同統治者であった総主教フィラレートの許可を受け、さらにニージニイ市民の援助を得たアヴラーミイは、ウンジャからかつて修道院のあった場所へと聖マカリーイのイコンを移した。それとともに彼は、聖人マカリーイの逝去した七月二十五日を市を開催する日と定めた。B・П・ベゾブラーゾフは彼の『ニジェゴロド定期市概説』の中で、この一六二四年をもって「マカリーエフ定期市にとって確認できる歴史が始まる」と記している⁽⁷⁾。

修道院の復興とともに多数の信者や巡礼が訪れ、聖人マカリーイはヴォルガ流域の商業の守護者として信仰されるようになった。市の立つ日は、「修道院では朝から晩まで祭礼歌がほとんど途切れることなく、ひっきりなしに祈禱があげられ、そして鐘の音はるかヴォルガの

広大な川面にまで鳴り響いていた。その鐘の音は、忙しげに立回る何千もの人々の群れのざわめきとまざりあい、品物の搬入や搬出にともなう騒音とひとつになつてゐた⁽⁸⁾。この頃の市に運びこまれた品物としては、ルッイスコヴォの麻布、ケルジェネツの木皿、奥ヴォルガの帽子や靴、ムラシキノの手袋や長外套や帽子、マカリーエフ周辺の農民による手工芸品があつた⁽⁹⁾。

こうした商業活動の展開と、商取引の安全をもたらし、た平和な状況とは、その当時のロシア社会全体の情勢と対応していた。すなわち十七世紀初頭の偽ドミートリーの出現に代表される「動乱の時代」の終結による政治的安定は国内商業を発展させた。その中でマカリーエフ定期市は着実に成長し、そのためにモスクワの支配階層もこの市の存在に着目するようになる。一六四一年にマカリーエフ定期市が公式に認定されたことは、そのことをはっきりと示すものだった。すなわち、この年に皇帝ミハイルは勅令の中でこの市を認め、修道院に対し、市へやって来る商人から税を徴収する権利を与えている。このためにП・И・メーリニコフは、先のペゾブラーゾフとは異なつて、この一六四一年をマカリーエフ定期市の

始まりの年としてゐる⁽¹⁰⁾。

ミハイルにかわつて皇帝の位に就いたアレクセイは、一六四八年の勅令の中で、五日間の税なしの商取引を認めてゐる。しかしこの頃の市は修道院に付属しており、市の収益のすべてがアレクセイの命に従つて、修道院の「燈明と香」の費用にあてられてゐた⁽¹¹⁾。

十七世紀後半の市にはロシア全域だけでなく国外からの商人が訪れ、市は二週間にわたつて開かれた⁽¹²⁾。一六六七年に皇帝アレクセイは、市で徴収した税を国庫に収めるように命じ、七八年にその額は三五〇〇ルーブリにのぼつてゐる。しかし市の管理をめぐる国と修道院との争いは、いまだこの時期には修道院側に分があつた。次帝フョードルの補佐役でスズダリ大主教であつたイラリオンは、市を修道院の手に戻すように皇帝に対し進言し、この進言は一六八一年に実現されている。すなわち、マカリーエフ定期市の管理権と警察権は修道院長に属するものであり、市の場所も修道院の所有するものであつた。ピョートル大帝の皇帝即位は一六八二年だが、その頃の市の様子は修道院文書に残る次の記事によつて知ることが出来る。

表1 1720年の市における売上高商品別

商 品	売 上 高 ルーブリ	割 合 %
魚、魚製品	36,582	16.3
穀物	4,135	1.8
塩	3,459	1.5
酒類	853	0.4
砂糖	680	0.3
小計	45,709	20.3
織物、絹、木綿	64,006	28.6
小間物	5,408	2.5
毛皮	59,988	26.8
皮革、はきもの	1,848	0.8
黒色・非鉄金属、金属製品	17,152	7.6
貴金属、貴金属製品	2,085	0.9
筆記用紙、書籍その他	1,816	0.8
石けん	582	0.2
ガラス、ガラス製品	551	0.2
その他	25,431	11.3
小計	178,867	79.7
合計	224,576	100.0

出典 Кафенгауз, 1958, стр. 163.

一九三年（西暦一六八五年）のマカリーエフ定期市においては、売却価格一ルーブリあたり一〇コペイカの割合で、六六八、〇〇〇ブードの塩による四、一二ルーブリの市関税が修道院に納入された。魚、平底船の売却価格一ルーブリあたり一コペイカの税、一、五八二ルーブリ五〇コペイカ。蜂蜜による税収入二〇〇ルーブリ。馬による税収入一、〇〇〇ルーブリ。

六七二の店舗、四四八の露店からの税二、九七八ルーブリ四九コペイカ。
運搬税七〇〇ルーブリ。
税収入合計 一〇、六七三ルーブリ⁽¹³⁾。

ロシアをそれまでの後進国から、西欧と競うことのできる大国へと一躍発展させようとしたピョートルが、国内産業を発展させるため定期市に多くの関心を払ったのは当然のことである⁽¹⁴⁾。このマカリーエフ

の市をモスクワの「国内港」と呼んだ⁽¹⁵⁾彼は、定期市に対する権利を修道院の手から奪い取った。

一七〇〇年四月にピョートルは、定期市の収益を国庫に収めるように命じた。この命令はのちに、利益の一部を国家に、一部を修道院に収めるという形に改められたが、最終的には修道院が収益に対して持っていた特権が完全に廃止され、市は国家によって管理されることになった。すなわち、一七一八年に市は商業省の管

表2 売上高県別

県 名	届 出 数	売 上 高 単位千ルーブリ
アルハンゲリスク	79	13.8
ノヴゴロド	41	4.7
ベテルブルグ	4	0.4
モスクワ	270	49.7
ニジェゴロド	61	4.0
カザン	130	32.5
アストラハン	231	88.0
ベルゴロド	17	5.0
ヴォロネシ	23	3.6
シベリア	49	20.0
その他	17	2.8
合 計	922	224.5

出典 Кафенгауз, стр. 164.

轄下に置かれたのである（完全に国家の管理となるのは一七五一年である⁽¹⁶⁾）。その直後の一七二〇年の市関税台帳を詳しく検討し、すぐれたモノグラフを残したB・B・カフエンガウスによれば、その年の商品売上高は二二四、六〇〇ルーブリ、売上げによる税は九、七〇〇ルーブリであった⁽¹⁷⁾。売上高の商品別、ならびに県別の内訳は第一、第二表のとおりである。

商品別内訳を見れば、マカリーエフ定期市は「まず何

よりも織物、毛皮と魚の市」であったことがわかる。それに続いてシベリア（ウラル）からの鉄などの金属が多く、「その他」としては塗料、染料、火薬などの油脂製雑貨が含まれていた。また、地域別に見ると、モスクワ、またカザンやアストラハンといったヴォルガ中・下流地域の割合が多く、シベリアもこれに続いている。この他に、例えばウクライナのスヴィンスカヤ定期市との密接な結びつきなどによって、当時のマカリーエフ定期市はすでに「全ロシア市場」の性格を持っていたと言っている。このことは商品の売り先を示す売上高の県別内訳によっても明らかとなる（第三表）。むしろ、マカリーエフ市は十八世紀の初期という時代において全ロシア地域を完全にカバーするまでにはいたらず、例えばロシアの西部、西北部とのつながりはまだ弱かった。しかしこの市は、トボリスクやエニセイスクといったシベリアから、スヴィンスカヤ定期市を介したセフスクやブリャンスク、またドン河下流地域までをその商業圏に収めていた。その意味でマカリーエフは、モスクワとならぶ「当時形成しつつある全ロシア市場の中心」であった⁽¹⁸⁾。

ピョートル二世は一七二八年に、市の開始を六月二十

表3 1720年の市における購入高 県別

県名	購入高 単位ルーブリ
アルハンゲリスク	4,763
ノヴゴロド	1,049
ペテルブルグ	9,714
リガ	49
スモレンスク	2,883
モスクワ	43,402
ニジニノヴロド	1,879
カザン	4,510
アストラハン	18,600
ベルゴロド	29,495
ヴォロネシ	6,903
シベリア	8,621
記載なし	1,268
合計	133,126

出典 Кафенгауз, стр. 181—182.

九日、終わりを七月八日と定めた。さらに三六年以降には、始まりは六月二十日からとなった。⁽¹⁹⁾それまでは七月半ば以降に開かれていたのをこのように一ヶ月も早めたのは、他の定期市の利益を守るためであった。これはこの頃八月一日から始まっていたスヴィンスカヤ定期市、また九月十五日から始まるウクライナのクロレヴェツ定期市に商人たちを間に合わすことを目的としていた。⁽²⁰⁾ここにも他の定期市との結びつきを密なるものとしようにとする意図が示されている。

一七五五年には、市のより円滑な活動のためヴォルガ河岸に、八三〇戸の木造の商業施設が建てられた。さらにエカテリーナ二世の治世下の二七六六年には、市の収益の徴収がヤロスラヴリの商人Д・バルソフに四年間全面委譲されたあと、一七八〇年からは市は県税務局の管轄となった。そして毎年県税務局は、県知事の指揮下に定期市の開催時には店舗配置の決定と税の徴収とを遂行することになった。

一七六二年から三十年以上も続くエカテリーナ二世の統治期間は、国内産業の全面的発展の時期であり、定期市も大きく発展していった。七十年代にはロシア全域で一、六〇〇以上の定期市が存在し、その中でマカリーエフは、言うまでもなく、最大の定期市であり、「ロシアで最も重要な市として、国内商業の尺度となっていた」⁽²¹⁾のである。

ここでひとつの興味深い資料を紹介しよう。それは一七八八年に出版された『ロシア定期市辞典』で、作成したのは作家で歴史家、ジャーナリストでもあり、ロシア最初の民謡集の編者としても知られるМ・Д・チュルコフである。これは十八世紀後半にロシア各地で開催され

表4 1805年の市における仕入先

県 名	仕 入 高 単位千ルーブリ
サントベテルブルグ	1,600
ノヴゴロド	80
オロネッツ	220
ヴォログダ	220
トヴェーリ	3
ヤロスラヴリ	2,400
コストロマ, ネレフタ, キネシマ	500
モスクワ	5,500
カルーガ	350
トゥーラ	200
オリョール	12
クルスク	100
タンボフ	15
ペンザ	50
チエルニゴフ	200
リャザン	100
ウラジーミル	800
ニジェゴロド	1,500
カザン	1,700
シムビルスク	250
ヴァトカ	150
サラトフ	220
アストラハン	1,300
グルジア	20
キズリャル, タガンログ, ドン	550
シベリア	2,500

出典 Описание, стр. 66—70.

る。毎年、聖ペテロとパウロの日に始まり、三、四週間続行する。ここにはきわめて多くの商人が、ロシアやシベリアの全域から、またベルシヤ、トルコ、ポーランドからやって来る。⁽²²⁾

ていた定期市を、その所在地と定期市の名に従って配列した二二六ページの辞典で、記述それ自体は概略的でさほどすぐれたものではないが、こうした辞典が作られることが当時の定期市の発達ぶりを物語っていると云える。その中の「マカリーエフ定期市」の項を次にあげておく。

ロシアの栄えある定期市で、ヴォルガ左岸のマカリーエフ修道院の近くで行なわれる。ニジェゴロド県、ニージニイ・ノヴゴロドの下流六〇露里の所にあ

第四表は、十九世紀初頭のマカリーエフ定期市に搬入された商品がどこからもたらされたかを表にしたものである。主要な県についてその品物をあげるならば、ペテルブルグからは絹・木綿・毛皮・砂糖・コーヒーなどの外国品や植民地産品、ヤロスラヴリからは織物・ブリキ製品、工業品。モスクワからは金銀のどんす・服飾品・クリスタル・ガラス・各種の織物・書籍等々。ニジェゴロドからは帽子・毛皮・ガラス製や木製の皿、カザンか

らは毛皮・ブハラ織・皮革、アストラハンからは塩漬けの魚・ウラルのフェルト・イクラ、そしてシベリアからは中国品も含んで、鉄・毛皮・茶・絹製品・南京木綿などだった。⁽²³⁾この第四表と第二表とを比較すれば、モスクワとペテルブルグが大きな伸びを示しているのに対し、カザンやアストラハンといったヴォルガ中・下流の諸県がそれほど伸びを見せていないことがわかる。これはニージニイの市についても共通する現象となる。

十八世紀の末になって、それまでの商業施設の老朽化によって新しい建物を作る必要が生まれた。パーヴェル一世はカザンの商人エヴレイノフに対して、石造の中央商館の建設のために毎年二八、〇〇〇ルーブリの提供を要請し、そのかわり今後二十五年間は市の収益を彼のものとし、その後は国庫に収めることを提案した。他の商人たちの反対にもかかわらず、国とエヴレイノフとの契約は結ばれたが、その後、彼によって負わされた税の高いいことが市の衰退の原因となった。そこで一八〇四年にはアレクサンドル一世が、市の活動を圧迫するような独占販売を禁止し、エヴレイノフの準備した建設資材を国が買上げること、今後はニジネゴロド県知事の直接の指

揮下に定期市を運営することを命じた。さらに翌一八〇五年には、施設の建設に国費をあてることが決定された。定期市の新しい施設の完成は、途中で雪どけ水による損壊などで遅れ、一八〇九年であった。⁽²⁴⁾建設に要した国費は六〇〇、〇〇〇ルーブリという膨大な額だったが、その当時の中央商館が年一回の市によって一二〇、〇〇〇万ルーブリの利益をあげていたことを考えるならば、その出費もただちに回収できるはずであった。

(1) 例えば、すでに『原初年代記』の六五三二年(西暦一〇二四年)の項には、ルーシの人々がヴォルガ流域の生産力と商業活動に対し注目していたことが記されている。
「……国中に大きな一揆と飢饉とがおこった。ありとあらゆる人々はヴォルガを伝ってブルガール人のもとへ行き、麦を持ちかえって生きかえた」(Повесть временных лет. 1950: 99—100)

(2) Зайончковский, 1976: 980

(3) Зубов, 1839: 2 このアールスクの市では「陽気な歓楽」と「狂乱のオルギー」が見られたと記されているが(Мельников, А. П. 1917: 4)その内容はわからない。

(4) タタール人の侵攻によってこの町が沈んだという伝説の存在は(Мельников, П. И. «В лесах»)この町がカザン汗国に対する前進基地でもあったことをはっきりと示

- じつらる。著者：Тихомиров, 1962: 484
- (5) Олреアリウス、ジェンキンソンの旅行記を参照。オレアリウスはヴァシリゴロドについて簡単に言及している。またジェンキンソンは「カザンに「商人の島」が存在していたと記している (Jenkinson, vol. 1, 49)。
- (6) Безобразов, 1865: 10 ムンジャ近へにはマカーリエフとらう町が現存する。
- (7) Там же, 10
- (8) Мельников, А. П. 1917: 9
- (9) Зубов, 5
- (10) Мельников, П. И. 1880: 4 ただし「一六三六年にヴォルガを下ったオレアリウスの旅行記には市の言及がない (Олеарий, 1906: 362—3)」。彼は七月三十日にニージニイを出発し、八月五日にヴァシリゴロドを通過している。
- (11) Костомаров, 1905: 295; Безобразов, 10
- (12) 一七〇七年にこの市について言及しているオランダ人旅行者コルネリウス・デ・ブルインによれば、市は十五日間行なわれていた (Мельников, А. П. 1917: 5)。
- (13) Деловой справочник, 1922: 5
- (14) 一六九一年にビョートルの傳役ゾートフは「マカリエフの市について「つねに考えにいられておかねばならぬ大きな集まりである」とビョートルに書き送っている (Мельников, А. П. 1917: X)。
- (15) Мельников, П. И. 1846: 282
- (16) Безобразов, 11
- (17) Кафенгауз, 1958: 162
- (18) Там же, 184
- (19) Якофツェフスキー 二九五頁。また一七二〇年代には、七月二十六日から八月いっぱい行なわれていたとある (Киритов, 1977: 207)。
- (20) Зубов, 8
- (21) Там же, 9
- (22) Чулков, 1788: 114
- (23) Описание, 1829: 66—70 数字と資料の典拠は一八〇五年に「中国大使館で働いていたひとりの貴族から得た」という。
- (24) Деловой справочник, 6

III

一八一六年八月十八日、市の正式な開催期間もすでに終り、商人もほとんどが市をあとにしていた。その時、市の四ヶ所から同時に火の手が上がり、中央商館とその周辺の店舗が全焼した。裁判所は火事の原因究明を行なう、近くのクニャギノ郡の三人の農民を捕えたが、証拠不十分で釈放せざるをえなかった。⁽¹⁾

しかしながら、「民の声は神の声」という古くからの

ロシアの謠めがあるとおり、ひとつの噂が広まっていた。それは、市はおかみの策略によって焼き払われたのだというものであった。あの火事は必要だった、火事が起こらなければ、あれほど多額の金をつぎこんで、しかも出来上がったばかりの市をいきなり、別の土地へ移動することなど不自然である、おそらく火の手は五〇露里以上も離れたニージニイの高台からも見えただろう、火事の張本人はニジェゴロド県知事のC・ブウイホヴェツであるにちがいない、といったことがさやかれていたのである。⁽²⁾ こうした噂の背後には、言うまでもなく、定期市をニージニイへ移そうとする思惑とそれに対するマカリーエフの人々の反発が存在していた。

マカリーエフは、ヴォルガ沿岸の市の場所としてすでに述べた有利な諸条件を持っていた反面、不利な条件をも持っていた。それは、場所が全体として手狭なこと、土地が低く砂地であること、ヴォルガの増水の際には荷の積みおろしに不便なことなどであった。⁽³⁾ このため、市の場所をどこかに移そうという考えはかなり前からあった。例えば、マカリーエフとヴォルガをはさんだ対岸にあるルウイスコヴォは候補地のひとつで、そのことがも

とになって双方の町の人々の間で抗争も生まれていた。⁽⁴⁾ また、マカリーエフ焼失後に、ニージニイへの移転を皇帝に上申したルミャンツェフ伯爵は、火事直前のマカリーエフを視察した際に、町の商人に対し市を移すことを提案している。⁽⁵⁾

しかし、一八一六年の火事はそうしたマカリーエフの市をめぐる難題を、きわめて手際よく一挙に、しかもタイミングよく解決することになったのである。

火事が起こった翌月の九月七日に、ニジェゴロド県知事ブウイホヴェツは、マカリーエフの岸が毎年ヴォルガの流れによって洗われるため、市をもとの場所で再開するのは危険であり、どこか別の場所へ移すことが望ましいと述べる。また十月には、先のルミャンツェフ伯が皇帝アレクサンドル一世に対し、市をニージニイへ移すことを表明する。そして彼は、「定期市はニージニイ・ノイヴゴロドによって多くの需要をみたすであらうし、またこの町は定期市によって、国家第三の首都へと成り上がるであらう」と述べている。⁽⁶⁾

一八一六年十月三十一日に皇帝はルミャンツェフ伯の上申を受け入れ、ここに市のニージニイ移転が決定した。

火事が起こってから二ヶ月半足らずという実に迅速な決定だった。こうして新たに建てられたばかりのマカリーエフ市は、わずか七年でその使命を終えたのである。

中世から近世にかけてのロシアの定期市の歴史は、ロシア社会の歴史と切り離しては考えることができない。ペゾブラーゾフによれば、市の歴史はモンゴル人に対するたたかいと周辺民族に対するキリスト教の伝道、またモスクワ・ロシアによる領土拡大の動きと密接に結びついていた。⁽⁷⁾ マカリーエフ定期市がモスクワとならぶ全ロシア市場の中心として飛躍的に発展していったことは、そうした流れの上でとらえることができるであろう。

M・K・ロシコヴァによれば、十九世紀前半のロシア全域の定期市は次の三点の特徴を持っている。1 十九世紀の初頭における定期市の発達は、工業地域よりも農業地域でより顕著であること。2 辺境地域で新たに定期市が発生するとともに、それまでの定期市が成長したこと。3 常設的商業の成長と定期市商業の衰退といった現象が見られること。⁽⁸⁾

ロシコヴァ女史は、十年代から二十年代にかけての県知事報告書を資料に用いて以上の特徴を確認しながら、

十九世紀初頭の二十年間にロシア国内の各地を結ぶ商業的連鎖が出来上がっていったことを指摘するのである。⁽⁹⁾

とすれば、一八一六年に焼失してニージニイへと移転し、翌年から仮設の形で開催されたあと二二年に正式に発足した「マカリーエフの定期市」は、十九世紀ロシア定期市全体の起点となっていたと言える。ニージニイの定期市がその後十九世紀を通して大きく発展していったことを考慮するならば、マカリーエフの滅亡と移転は十二分なる歴史の意味を持ち、その意味はニージニイへと継承されていったことがわかるだろう。⁽¹⁰⁾

- (1) Деловой справочник, 7
 - (2) Мельников, А. П. 1917: 35—36
 - (3) Описание, 30
 - (4) Мельников, А. П., 10—11
 - (5) Деловой справочник, 7
 - (6) Там же, 7—8
- ただしルミャンツェフは新しい定期市の場所として、ニージニイの町とベチエルスキ修道院との間の高台を考えていた。また、十八世紀にニージニイの町が定期市という形態を持っていたかについては疑問がある。前節で見た Кирилов, Чулков によれば、むしろここには定期市がなかったと言うべきである。しかしその反面、ヴォルガの水運やマカリーエフよりもモスクワに近

マカーリエフの歴史的発展

年	利 益 (ルーブリ)	市へ運びこま れた品物の量 (銀ルーブリ)
1697	4,741	80,000
1741	36,517	489,000
1790	75,615	30,000,000
1840 (=1841)	143,515	55,000,000

出典 Мельников, П. И. 1850, стр.
6-7.

いことなどの条件
によって、ニージ
ニイは十八世紀以
降においてロシア
各地だけでなくイ
ギリス、ベルシャ
などからも商人が
来訪する国際的な
大商業都市となっ
ていた (Тихоми-
ров, 1962: 440—

443)

(7) Безобразов, 14

(8) Рожкова, 1955: 298

(9) Там же, 305—306

(10) 右の表を参照のこと。ただし資料の典拠は明記されて
いない。

四

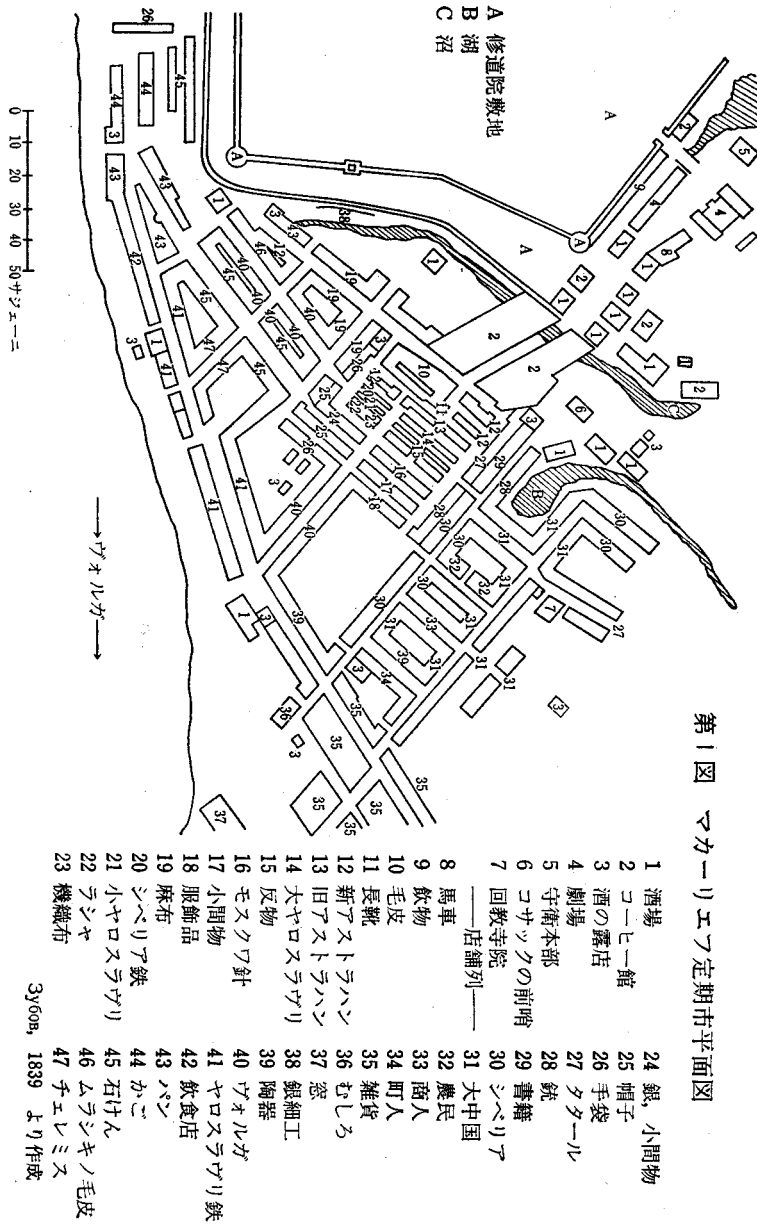
マカーリエフ定期市の全景ならびにその中の様子はど
のようなものであったか。十七—十八世紀にこの市がい
かなる施設を持ち、どんな店舗配置になっていたかにつ
いてはほとんどわかっていない。ただ、十九世紀初頭にこ

の市を訪れた者の記録によって、その頃の市の様子をい
くらか知ることができる。

市はヴォルガ左岸のマカーリエフ修道院のある岸
砂地で開かれていたが、土地の狭いことのために、対岸
のルウイスコヴォにも広がっていた。後者は、ヴォルガ
とスンドヴィク河との合流地点にあって船を停泊させる
には十分の条件を備えており、古くから穀物取引の中心
地として知られていた。ルウイスコヴォには、庶民のた
めの酒場や飲食店、旅籠や鍛冶屋があり、ヴォルガの岸
に沿って、穀物やパン、クワスやビローグなどを売る仮
設小屋が並んでいた。⁽¹⁾

一八〇九年に作り直される前のものと思われるマカー
リエフ定期市の店舗配置を含む平面図は次のとおりであ
る (第一図)。

一八〇二年のマカーリエフ定期市の区域内には、五〇
〇以上の店舗と六五〇の仮小屋があったと資料に記され
ている。⁽²⁾二年後の一八〇四年には、レマンという名の医
者がマカーリエフの市を訪れ、この市の中心部の建物が
木造であり、市の三週間だけのために毎年新たに、しか



も「ロシア人特有の早さで」建てられることに驚嘆している。さらに彼は次のように記している。「店の多くは板張りで、そのうちのいくつかの前面は磨かれていた。

それらの店は真直ぐな通りを形作っていたが、そこにはホテル、レストラン、コーヒー館、劇場、ダンスホールなどがあった。これらの建物はどれも飾りや模様に凝っていたが、数日間まるで魔法によってそびえ立ったかと思われ、そのあと八月はじめには再び姿を消すのだった」。

二つの中央通りには日光をさえぎるための屋根がついていたというから、さながら現代のアーケードの如き光景であつたろうか。この中央通りの店では、流行品や宝石などの贅沢品が売られていて、例えば時計屋は四〇軒ほどもあったという⁽³⁾。

一八〇九年に完成した定期市の中央商館 *Гостиный двор* は三つの石造建築、木造二階立て二四棟からなり、ここには一、四〇〇の小売店舗が収まっていた。この商館は長さ三〇〇サジェーニ（一サジェーニは約二メートル）、幅八〇サジェーニで、ここには市管理局事務所、警護本部、消防本部、取引所等があった。そしてこの中央商館の周囲にも、多くの店舗が並んでいた。その数は

木造二階立ての建物一二と、そこに含まれる小売店一、八〇〇にもものぼった⁽⁴⁾。

名門貴族でしかも詩人でもあったИ・М・ドルゴリーキイ公爵がマカリーエフを訪れたのは、市を壊滅させた火事が起こる前の一八一三年である。前年までヴラジミル県の知事の職に就いていた彼は、一八一三年の七月はじめにモスクワを出立し、自分の持ち村のあるニージニへと向かったが、その時期はちょうどマカリーエフの定期市が開かれていた頃だった。彼は七月末から八月はじめという市の最盛期にマカリーエフに立寄っているが、その際の見聞録は当時の市の様子を知る上で実に貴重な資料となっている。

ドルゴリーキイは、市の中心部について次のように記している。その頃建てられたばかりの木造の建物群と、その間をぬうかのように走る幅の広い大通りとは砂地の上有る。この中にある「取引ホール」と呼ばれる建物は、木造ではあるがとても美しい二階立てで、その正面はベテルブルグのヴァシーリイ島にある取引所の正面と同じである。

中心街はその周囲を掘割で囲まれていたが、これは火

事の延焼をさけるためである。火事に対する警戒心は強く、中央商館だけでなく広場の出店などでもサモワールをわかつこと、ならびに夜間に点燈することが禁じられていた。そしてこれは「絶対に欠かせない用心」とされていた。

中央商館の内部には、ドルゴルーキイによれば、一、一五一軒の店があった。そしてこの商館の外側に市の行なわれる期間だけ作られた出店は九七七軒を数え、ここでは毛皮や陶器、ガラスや馬車、家具、手工品などが売られていた。また掘割の外側には、二一四軒の酒場とコーヒー店があった。こうして市全体としての小売店舗数は二、三〇〇を越え、一八一三年にそこから納められた税金は一八、三六八ルーブリにのぼったという。⁽⁵⁾

ドルゴルーキイは、市の娯楽の記述にもかなりのスペースをさいている。民衆の娯楽については、後に見るように、かなり冷淡な態度を取る部分もあるが、全体としては彼のすぐれた観察力が丹念な記述となって現われている。

彼によれば、このマカリーエフの市における娯楽とは次の四つである。それは、まず第一に馬の曲乗り、次に

人形劇、第三に富くじ、そしてヴォルガ河の船遊びである。

馬の曲乗りは有名なキアリーニとその夫、そして家族によって大きな馬場で行なわれたとある。キアリーニはヨーロッパ各地を訪れて、いたる所で人々の喝采を浴びていたが、「大都市にうんざりして」定期市をまわるようになった。曲乗りが行なわれる場所は人々でいっぱい、市を訪れた者は誰もがこれを目にして満足していた。ドルゴルーキイ自身も彼女の演技を見るために二度出かけて行った。人間の身体というものがあれほどまでにしなやかで、さまざまな意味をこめて自らの身を使いこなしているのには驚かざるをえない、馬もよく人間によって馴らされており騎手のかけ声に十分注意を払い、その動きには間違いがない、と公爵はその印象を書き残している。⁽⁶⁾

庶民は自分たちの見世物へと殺到していた。それは人形劇、熊・ラクダ・猿の芸、そしてスコモローフの芸能だった。公爵が記しているスコモローフとは、主として中世から近世にかけてロシア各地を渡り歩き、音楽や踊り、人形劇や動物芸、口承叙事詩などを披露した放浪芸

人である。十九世紀にこの芸人はほとんど消滅しており、スコモローフはその最後の姿を市に現わしたのかもしれない。

そうしたいいくつかの庶民の見世物の中で、公爵はたまに人形劇のひとつをのぞく機会に恵まれた。だが彼は演技者や見物人ほど愉快な気分にはなれなかった。「楽師がバイオリンを弾き、人形を持った男が人形に会話をさせる。その間に人形が額をがたとぶつけて音を立てるが、観客は笑ってとても楽しそうだ」と記す彼には、この人形芝居の魅力が理解できない。「こうした遊樂の中に修道女が登場して、それがもとでおもしろおかしくなるなどということが、わたしには不思議に思われた」。そして彼は、こうした人形劇が全く不快であり、どうして許可されるのかといぶかしがっている⁽⁷⁾。

彼は富くじについてもごく一般的なことしか記していないが、最も気持のよい娯楽として、十ルブリを払ってのヴォルガ上での船遊びをあげている。彼が市を訪れたのは七月末から八月にかけての暑い時期であったので、市の雑踏を離れてヴォルガの川面の冷やかな空気にふれることは快いものであったにちがいない。彼は「巨大な

水の広がりわたしの感情を興奮させた」と詩人らしく述べている⁽⁸⁾。

- (1) Мельников, А. П. 1917: 20
- (2) ПГАДА (ヤコフツォフスキーによる)
- (3) Мельников, А. П. 1917: 21. トマンについては不明。彼の旅行記のフランス語からの露訳は、『Северный архив』(1822)に掲載された。
- (4) Мельников, П. И. 1850: 5—6; Деловой справочник, 1922: 6
- (5) Поповский, 1870: 100—101. 彼の旅行記の初出は、『Чтения в Обществе истории и древностей российских при Московском Университете』(1870)
- (6) Поповский, 1870: 107—108. ドルゴルーキイがマカリーエフを訪れた一八一三年にこの市を訪れたキアリーニが、著名なサーカス一家キアリーニの中の誰かについては不明。一家のある者は一八八〇年代に日本を訪れ、「チヤリネ大曲馬団」として広く知られている。参考として次の記事を引いておく。「キアリーニ一家は、イタリー最大のサーカス家で、フランスに最初に現われたのは一五八〇年、サン・ローランのフォワール(市、日本でいう縁日の市のようなもの——筆者)に、綱渡りの踊り手、マリオンネットの見せ物師としてであった。一家はみんな綱渡りが出来て、綱の上で踊って見せた。一七一〇年、一家はブルヴァール・デュ・タンブルのフュナンビュール座へ現わ

れた。一七七九年には一家のフランチェスコがハンブルグで影絵芝居をやった。一七八四年には一家のアンジエリックがバリのシルク・アストレで曲馬師となった。一八五〇年、綱渡り女で美人だったアデレードはイタリアの狙撃兵大佐と結婚した。同じく曲馬師だったコンスタンスはロシアの貴族と結婚した。しかしこの家族で最も有名なのはグイセッペで、サーカス師フランコニの弟子であった後、一八四七年頃サーカスを創設し、一座を連れてアメリカに渡り、大陸を横断してサンフランシスコから日本へ向けて出港し、日本と中国、インドを訪問し、オーストラリア、チリ、ブラジルを訪れた」(蘆原英了「サーカス渡来」『学鑑』第七一巻十二号 一九七四年)

(7) Дюропына, 108

(8) Там же, 109

五

ドルゴルーキイはまた、マカーリエフ定期市の記述の冒頭に次のように書き記している。

ありとあらゆる大騒ぎ、商売に対するみんなの意欲、莫大な額の金銭の動き、商行為での入念な駆け引き、あらゆるものをロシア全域へ供給すること、言いかえるならば、あらゆる商人の勘定の中心——それが

マカーリエフの定期市である。⁽¹⁾

これは市の持っている経済的機能の大きさを示している。だが、市はそれ以外の機能をも持っていた。それはドルゴルーキイの記すところの娯楽である。むろん彼のあげたものの以外にも、市の娯楽は存在していた。マカーリエフの市の広場や通りでは、中世放浪芸人の子孫である軽業師や曲芸師によるさまざまな芸、ラヨークと呼ばれる覗きからくりの一種、小屋掛芝居や見世物といった数多くの大道芸が披露され、市を訪れた人々を夢中にさせていたにちがいない。⁽²⁾ そうした娯楽にみちあふれた市とは、「経済的機能に加わる象徴性」⁽³⁾をそなえた「開かれた世界」であった。

ところでドルゴルーキイはさらに記す。

イギリス式箱馬車とトロイツコエの人形、ガラスのシャンデリアと酒場のコップ、パリ風の帽子とオレンブルグ風農民外套、金属張りの聖書とホルイ(ヴラジミール近くの村——引用者)のアイコン、くろてんの毛皮と羊の毛皮、ラファエロの絵と民衆版画「猫を埋葬するねずみ」、ロモノソフとソーヴェスチドラール(?)、ジャスミン香水とタール。言

わばここには、役に立つものすべてがあった。相対するすべてのものがここでひとつになり、一ループ銀貨や十ループリ金貨へ、札束へ、そして最後には巨額の手形へと姿を変えていくのである⁽⁴⁾。

市の経済的機能がもたらしたこうした品物の氾濫と人の雑踏とは、市に過剰と混乱のイメージを与える⁽⁵⁾。市とは無秩序と浪費の雑多で過密な空間だった。その意味で市は単なる経済的機能をはたす場であるにとどまらず、一種の非経済的な機能をも備えた場となるであろう。マカーリエフの定期市もまた十九世紀ロシアの民衆に、過剰と享楽の市体験の記憶を残したのである。

(1) Долгорукий, 1870: 98—99

(2) 例えは「マカーリエフではないがニージニイ定期市に関する次の記述が参考になる。 Описание, 1829: 107—108; Зубов, 1839: 40—42; Гациский, 1875: 172—173 また、モスクワやハテルブルクにおける街頭の芸能については次のものが実に貴重な証言を含んでいる。 Алексеев-Яковлев, 1948 これは「定期市のフォークローア」から「都市のフォークローア」への転換をも示す資料として価値が高い。

(3) 山口昌男『道化の民俗学』（一九七五年 新潮社）六

二頁。彼は M・M・パフチーンに従い、市場を「開かれた世界」「自由な接触」「平等、または対等」「流動性」「変貌」「非日常性」といったイメージを持つ「カーニバル的生」の世界ととらえている。

(4) Долгорукий, 99—100

(5) В・И・ボルドミンスキイはその『ダリー』伝（一九七二）の中で、ニージニイ定期市における人と物の過剰を鮮かに描き出している。ダリーの『ロシア諺集』『大ロシア語辞典』といった今なお価値を失なわない記念碑的労作がニージニイの市における言葉の収集によって（むろんそれだけではなく）、すなわち市の言葉の過剰の中から生み出されたことに注目したい。

参考文献

- Алексеев-Яковлев, А. Я. Русские народные гулянья. Л.-М., 1948.
Безобразов, В. П. Очерки Нижегородской ярмарки. СПб., 1865.
Богатырев, П. Г. Художественные средства в юмористическом ярмарочном фольклоре. (1968) В его кн.: Вопросы теории народного искусства. М., 1971.
Варганов, Г. Л. Городские ярмарки центральной части европейской России во 2-й половине 18 в.

- Ленинградский Гос. Пед. Институт, Ученые записки, т. 194, 1958.
- Виноградов, В. В. Ярмарки. В кн.: Россия в конце 19 века. СПб., 1900.
- Галисский, А. С. Нижегородка. Путеводитель и указатель по Нижнему Новгороду и нижегородской ярмарке. Нижний Новгород, 1875—77.
- Деговой справочник Нижегородской ярмарки. М., 1922.
- Денисов, В. И. Ярмарки. СПб., 1911.
- Дихтяр, Г. А. Внутренняя торговля в дореволюционной России. М., 1960.
- Долгорукий, И. М. Журнал путешествия из Москвы в Нижний 1813 года. (1870) В кн.: Изборник, 1764—1823. М., 1919.
- Зайончковский, П. А. Ярмарка в России и СССР. Советская историческая энциклопедия, т. 16, М., 1976.
- Зубов, А. Описание нижегородской ярмонки. СПб., 1839.
- Канделаки, И. Роль ярмарок в русской торговле. СПб., 1914.
- Кафенгауз, Б. Б. Очерки внутреннего рынка России первой половины 18 в. М., 1958.
- Кирилов, И. К. Цветущее состояние всероссийского государства. М., 1977.
- Костомаров, Н. И. Очерк торговли Московского государства в 16 и 17 ст. Собрание сочинений Костомарова, кн. 8, т. 20. СПб., 1905.
- Максимов, А. А. Архитектура русских торговых рядов. История СССР, 1972—1.
- Мельников, А. П. Столетие Нижегородской ярмарки 1817—1917. М., 1917.
- Мельников, П. И. Нижегородская ярмарка в 1843, 44 и 45 годах. Нижний Новгород, 1846.
- Его же, Исторический очерк Нижегородской ярмарки. Нижний Новгород, 1850.
- Москвич, Г. Иллюстрированный практический путеводитель по Волге. Одесса, 1902.
- Олеарий, А. Описание путешествия в Московию и через Московию в Персию и обратно. СПб., 1906.
- Описание Нижегородского и ежегодно бывающей в нем ярмарки. М., 1829.
- Остроухов, П. А. Нижегородская ярмарка в 1817—1867 гг. Исторические записки, т. 90, М., 1972.
- Рожкова, М. К. К вопросу о значении ярмарок во внутренней торговле дореформенной России.

Исторические записки, т. 54, М., 1955.
Тихомиров, М. Н. Россия в 16 столетии. М., 1962.
Цытков, М. Д. Словарь учреждений в России ярма-
рок. М., 1788.
Яковлевский, В. Н. Купеческий капитал в феодально-
крепостнической России. М., 1953. (邦訳『封建
農奴制における商人資本』石川郁男訳 未来社
一九五六)

Burgess, M. Faire and Entertainers in 18th century
Russia. Slavonic and East European Review
vol. 38, 1959.
Jenkinson, A. Early Voyages and Travels to Russia
and Persia. vol. 1—2, London.
Walford, C. Fairs, past and present. London, 1883.
(一橋大学専任講師)